全電源喪失の記憶

証言　福島第1原発

3

■第4章「東電の敗北」

「もう絶対行かない」

建屋爆発で戦意喪失

3月14日午前11時1分、福島第1原発3号機の原子炉建屋が爆発し、きのこ雲のような煙が上がった。隣の2号機タービン建屋前で復旧班電気設備担当の松本光弘(47)らが乗ろうとしていた業務車は、飛んできたがれきでつぶされた。

「外の放射線量が高い。建屋の中で待機してください！」。近くにいた放射線管理担当の保安班員が叫んでいた。

松本たちは周囲の粉じんが収まるのを待ち、2、3号機の間の構内道路を走って避難した。路上に落ちた建屋の壁を乗り越え、一度だけ3号機を見上げると、建屋上部がなくなっていた。

▲福島第1原発3号機原子炉建屋の水素爆発＝2011年3月14日（福島中央テレビ提供）

松本の前方を防護服姿の作業員たちが何人も走っていた。全面マスクで息苦しかったが、ひたすら走った。早くここを離れたい一心だった。

免震重要棟にたどり着くと、松本たちを現場に送り出した復旧班の池田公男(50)が待っていた。「生きてた。良かった」。池田は泣いていた。

爆発が起きた時、池田は松本たちを「死なせてしまった」と思った。それでも「何とか無事に帰ってきてくれ」と、祈るような気持ちで待っていたのだ。

現場から戻った松本たちは全身、粉じんで真っ白になっていた。松本は「大丈夫だって言ったじゃないか」「うそつき！」と声を荒らげた。

松本たちを送り出す際「当面、大丈夫」と言ったのは第1復旧班長の稲垣武之(47)だったが、松本は誰かに怒りをぶつけずにいられなかった。

稲垣が振り返る。「彼らには余震や爆発の中、ものすごい努力をしてもらったんです。だけど2度も死ぬ思いをさせてしまった。顔面蒼白になって戻ってきたのを見て胸が締め付けられました」

免震棟に戻った松本たちはもう誰も、どんな情報も信じられなくなった。「完全に戦意喪失でした。『もう絶対に行かないぞ』って」

松本の脳裏には今でも3号機爆発の光景が鮮明によみがえる。「免震棟に詰めていた人が事故後に『死を覚悟していた』なんて言うでしょ。だけど俺は死ぬって覚悟もないまま実際に死にかけた。本当に目の前に『死』があったんですよ」

当面の作業がなくなった池田は、事故後初めて妻に電話をかけた。

「生きてた！」。妻は池田の声を聞いて泣きだした。電話越しに両親や息子が歓喜する声も聞こえた。「あの爆発で生きていたなんて。生きてた。生きてた」

周囲にはまだ家族の安否が不明な同僚もいる。池田は小声で「生きてたよ」と応じた。妻はいつまでも泣いていた。

電気設備担当の約30人はほとんど寝ずに作業を続けてきた。多くは一連の作業で100ミリシーベルトを超える被ばくをした。（敬称略。年齢、肩書は当時。共同通信　高橋秀樹）